実践2

東京都・私立郁文館夢学園
郁文館中学校・高校／郁文館グローバル高校

主体性と協働性、グローバルな視野の育成を目指した探究学習を推進

東京都・私立郁文館夢学園では、学園全体で生徒主体の探究学習を推進し、主体性や協働性の涵養を図ってきた。2018年度からは、教育活動の軸としてSDGs（＊1）を取り入れ、よりグローバルな視点を重視した取り組みに転換している。

夢をかなえるための人間力・学力・グローバル力

東京都・私立郁文館夢学園は、郁文館中学校と郁文館高校、海外大学への進学も視野に入れた指導を行う郁文館グローバル高校の3校から成る中高一貫校だ。教育目標に「子どもたちに夢を持たせ 夢を追わせ 夢を叶えさせる」を掲げ、その夢をかなえるための3つの力として、夢を持ち、自ら人間性を高めていく「人間力」、学ぶ意欲と学習習慣を備え、絶対的な知識と夢実現に必要な応用力を獲得するための「学力」、主体的に生き抜くために異質な他者と共生し、未来を切り拓く「グローバル力」の育成を図っている。

例えば、「夢合宿」（中学1年次は5泊、2年次は7泊、高校は10泊。郁文館中学校2年次と郁文館グローバル高校2年次は海外研修・海外留学を実施）では、農林業体験や野外調理、アスレチックなどによる協働活動を通じて、社会で求められる人間性や協働性などを養う。郁文館高校の進路指導部部長の内藤昌宏先生は、次のように語る。

「高大接続改革で求められている資質・能力を育むための教育活動は、既に本校では行われていると自負しています。2018年度は、大学入試改革への対応も踏まえた、探究学習やポートフォリオの推進、英語4技能の育成の強化などの取り組みをより発展させることが課題でした」

生徒の潜在的な資質・能力が発揮される探究学習に

郁文館高校では、次期学習指導要領を見据えて、16年度から「社会探

東京都・私立郁文館夢学園

◎私立郁文館として創立。2010年度、男子校から共学化。難関大学の合格を目指す郁文館中学校・高校と、海外大学進学も視野に入れる郁文館グローバル高校を設置。
◎設立　1889（明治22）年
◎形態　全日制／普通科・国際科／共学
◎生徒数　学園全体で約1500人
◎2018年度入試合格実績（現浪計）　国公立大は、帯広畜産大、東北大、筑波大、千葉大、名古屋大、広島大などに21人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ390人が合格。海外大学は、アメリカ、カナダ、イギリス、マレーシアなどの大学に延べ52人が合格。
◎URL　https://www.ikubunkan.ed.jp/

内藤昌宏　郁文館高校　進路指導部部長
ないとう・まさひろ
教職歴33年。同校に赴任して33年目。英語科。

西谷知穂　郁文館高校　進路指導部
にしたに・あきほ
教職歴14年。同校に赴任して3年目。国語科。1学年担任。

牧野圭太郎　郁文館高校　英語科主任
まきの・けいたろう
教職歴11年。同校に赴任して11年目。英語科。

藤井崇史　郁文館グローバル高校　統括主任
ふじい・たかし
教職歴8年。同校に赴任して8年目。社会科。

宮坂美奈子　郁文館グローバル高校　夢教育推進部／留学・国際交流系主任
みやさか・みなこ
教職歴23年。同校に赴任して23年目。家庭科。

＊1　Sustainable Development Goals の略。2015 年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。①貧困をなくそう、②飢餓をゼロになど、17 の目標と 169 のターゲットから成る。

＊プロフィールは 2019 年 3 月時点のものです。

究」に取り組んでいる。社会が抱える課題について、生徒が自らテーマを決め、問題提起と仮説・検証を行う探究学習で、その進め方は次の通りだ。

1年次の4～10月、1年生全員で起業体験を行い、社会に対する課題や気づきを得る。2学期には、それを基に、社会問題を分類した13領域から1つ選び、学級横断で5～6人のグループを組んで、研究テーマを設定する。領域は、「国際政治・社会の課題と日本のかかわり方」など、文系6領域、「モノづくりのこれからと人間・社会」など、理系3領域、「経済発展と環境・持続可能な社会」など、文理融合4領域である。

2年次には、グループごとに探究学習を行う。1学期に、調査方法やプレゼンテーションなど、探究学習を進める上で必要な知識やスキルを学び、夏季休業以降、研究テーマに応じて大学や企業などでフィールドワークを実施。10月上旬の文化祭で中間発表を行い、3学期に全グループが発表用の動画を作成して、それをタブレット端末で配信し、代表グループが保護者会で発表する。

18年度は、「社会探究」の成果を携えて外部のコンテストに参加することを推奨した。あるグループは、東京都環境局が行った「プラスチックストローに代わるアイデア募集」に応募し、飴細工のストローを提案して最優秀賞を受賞した（**写真1**）。地元の飴細工職人に依頼して試作品を製作するなど、グループの意欲的な活動が実った。

「『社会探究』では、教科学習が必ずしも得意ではない生徒がリードしてグループをまとめるなど、その生徒が持つ資質・能力を発揮しています。生徒がこれまで気づかなかった力を自覚し、自己効力感を高めることができるのも、探究学習のよさだと実感しています」（内藤先生）

写真1　東京都環境局のアイデア募集で、飴細工のストローを提案する生徒たち。応募総数921件の中、最優秀賞を受賞した。

SDGsの観点から社会の課題に迫る

18年度からは、探究テーマを、持続可能な開発目標であるSDGsの17の目標と絡めて考えさせる実践を行っている。進路指導部の西谷知穂先生は、そのねらいをこう語る。

「SDGsでは社会の諸課題が挙げられているので、生徒は探究学習のテーマを具体的に絞り込みやすくなります。従来から行っているボランティア活動やNIE（＊2）なども、SDGsの観点から関連づけることができ、個々の取り組みとの相乗効果も高まると考えました」

それに伴い、2年次の1学期に行う修学旅行を「PBL（＊3）ツアー」とし、「社会探究」の起点にすることにした。北海道美幌町・知床は食糧問題・自然との共生、鹿児島県屋久島・口永良部島は生態系、カンボジアは貧困問題といったように、行き先は生徒が探究したい課題から考えられるよう、国内5か所、海外3か所に設定。生徒は各自の課題意識に応じて行き先を選び、4～6人が1グループとなって現地でフィールドワークを行う。そして、その体験を基に研究テーマを設定して探究し、最終的に個人でレポートにまとめる計画だ。

「PBLツアー」としたねらいは、視野を広げ、フィールドワークの手法を学ぶことだと、西谷先生は語る。

「これまでは、研究の進め方を生徒に任せていたため、大学や企業などに自ら連絡して探究するグループもあれば、自分たちで調べ学習をしてまとめるといったグループもあり、探究のレベルに差がありました。そこで、フィールドワークを全員必須とし、自分で探究を深める土台を身につけさせようと考えました」

毎朝全校で行うNIEでも、SDGsとの連動を進めている（**写真2**）。以前は、生徒に関心のあるト

写真2　NIEの活用の様子。生徒が家庭から持参した新聞から、関心がある記事を選んで要約。その後、グループに分かれて意見交換・発表を行う。

＊2 Newspaper in Education の略。新聞などを教材として活用する教育活動。　＊3 Project/Problem Based Learning（問題解決型学習）の略。

ピックを選ばせていたが、18年度は、SDGsと関連した記事を選んで課題や解決策を考えさせた（**図1**）。

「SDGsを教育活動の軸としたことで、特に地理歴史、公民、理科では、SDGsと関連づけた話がしやすくなりました。生徒も、授業で学ぶ内容が社会の課題とどのように結びついているのかを、実感しやすくなったと思います」（西谷先生）

生徒主体の「協働ゼミ」で協働の作法を学ぶ

郁文館高校が探究学習の転換を図る一方、郁文館グローバル高校では、13年度から探究学習として「協働ゼミ」を行ってきた実績がある。現在は、「ビジネス」「社会福祉」など、生徒の興味・関心から設定された17のゼミで、それぞれ10～20人で活動している。各ゼミには教師1人が顧問としてつき、卒業生1人がコーチとして研究をサポートする。

「協働ゼミ」の最大の特徴は、生徒の主体性と協働性の涵養を重視している点だ。ゼミのメンバーは3学年横断で、3年生がゼミ長を務める（**図2**）。ゼミ長は、リーダー研修を受け、リーダーシップとリーダースキルの違いや、組織のつくり方などを学ぶ。郁文館グローバル高校統括主任の藤井崇史（たかし）先生は、そのねらいを次のように語る。

「ゼミ内で合意形成を図りながら、主体的に社会問題に関するテーマを追究していく中で、コミュニケーションや協働の作法を学ぶことを重視しています。研究成果は、その副産物と捉えています」

「協働ゼミ」は、4月に1年生がゼミを選択するところから始まる。1学期から夏季休業にかけて協働研究を行った後、生徒が個別に研究テーマを設定。12月にレポートを提出し、保護者を招待したプレゼンテーション大会で、1年生は研究成果を発表する。活動の評価は、独自のルーブリックを使い、レポートだけでなく、途中で提出する研究計画書や先行研究レポート、プレゼンテーションなどを総合して行われる。ゼミ全体での研究成果よりも、個々の研究活動を対象に評価しているのは、主体性や協働性を重視しているためだ。

18年度は、教科の授業と「協働ゼミ」を連動させようと改善を図った。例えば、世界史の授業では、宗教問題など、現代の社会問題の背景を解説したり、英語の授業では、海外の政治家・経営者のスピーチや現代社会の課題にかかわるトピックを扱ったりと、単元の並べ替えや教科間連携を行うことで、生徒の教養を高め、興味・関心を引き出すのである。

「生徒は、探究学習を進める上でのヒントや材料を教科の授業で学んだことから探すようになり、教科の授業を聞く姿勢も変化しています。各教科・科目で学んだ知識や技能、思考力などを、『協働ゼミ』で発揮するという流れをつくりたいと考えています」（藤井先生）

19年度は、教科の内容と「協働ゼミ」の関係を示すカリキュラムマップを作成する予定だ。「協働ゼミ」で求められるリテラシーやコンピテンシーと、各教科・科目の各単元で学ぶ内容の関係を明確化し、不足している点は教科の指導計画に盛り込んでもらうなど、教科の授業との連動をさらに強めていく。

eポートフォリオの有効活用を検討

ポートフォリオの推進にも、18年度1学年から着手した。特に、海外大学への進学やAO・推薦入試の受

図1　NIEのワークシート

SDGsと新聞記事を結びつけて考えよう

クラス　番号　氏名

1 自分が興味をもった新聞記事で、SDGsと結びつけられる記事を貼りつけよう。＊社会探究とも関連づけられると、◎。

記事が大きい場合は、見出しが見えるように内側に折り込めるように貼るなど、工夫してください。

2 最も関係のあるSDGsの目標を選択しよう。＊複数に当てはまる場合も、最も当てはまるもの1つ選んでください。

目標番号

3 記事の内容を簡単にまとめよう。

4 その記事に興味をもった理由と自分の意見をまとめよう。

5 その記事の内容についてSDGsの観点から見た課題・課題解決策について考えよう。【発展】

NIEでは、SDGsと関連した記事に着目させて、考えを深めさせている。＊学校資料をそのまま掲載。

験者が多い郁文館グローバル高校では、ポートフォリオの重要性は一層高まると考えている。ポートフォリオ担当の宮坂美奈子先生は、次のように語る。

「郁文館グローバル高校の生徒は、約4割が海外の大学に進学し、国内受験もAO・推薦入試がほとんどで、どちらの入試でも高校時代の活動と、それを通して身につけた資質・能力がメタ認知できていることが求められます。現在は、時系列に沿って蓄積していますが、今後は、生徒自身が活動を系統立てて分類し、効果的な振り返りができるよう、指導していきたいと考えています」

18年度は、「Classi」（＊4）のポートフォリオや学習記録機能と並行して、「社会探究」や「協働ゼミ」の成果、NIEのワークシート、読書感想文など、紙の記録もまとめている。特に「社会探究」では、探究学習の過程で作成したマインドマップなど、手書きの記録も多く、紙とeポートフォリオを併用しているが、今後の大学入試改革を見据えて、「Classi」の活用のあり方を検討している。

英語4技能の育成に向け、リテリング重視の指導に転換

英語4技能の育成に向けた授業改善も進めている。特に、学力層が幅広い郁文館高校では、かつては読解中心の指導だったが、18年度1学年からは、学習内容を自分の言葉で伝えるリテリング重視へと転換した。単元の最後に、学んだことを英語で書いたり話したりできるようになることを目標とし、定期考査では長めの英作文を課すなど、アウトプットの場面を増やした。

タブレット端末を活用し、スピーキングのパフォーマンステストも行っている。英語科主任の牧野圭太郎先生は、その方法をこう説明する。

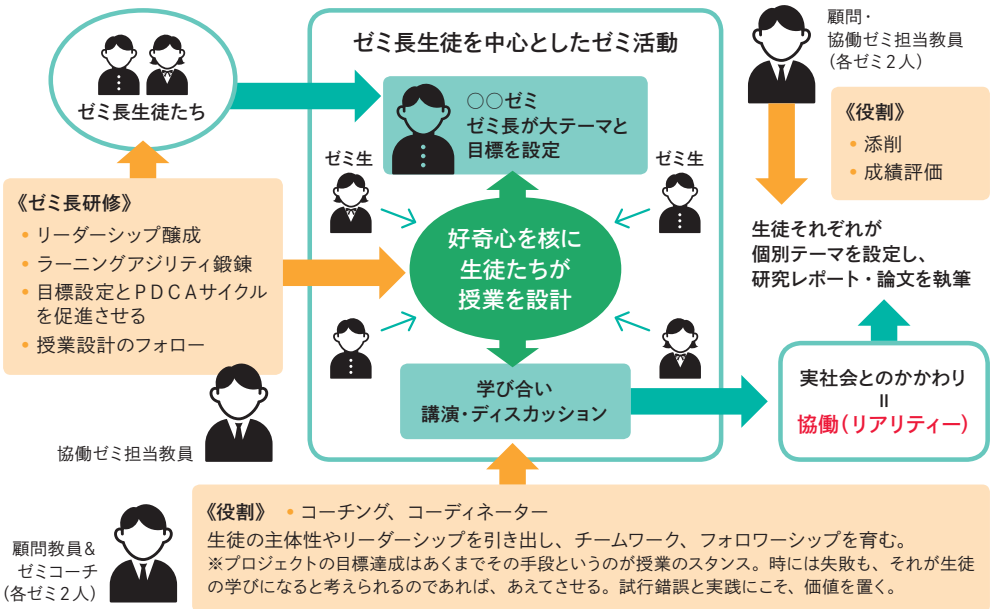
「タブレット端末に自分が英語を話す姿を動画として記録し、それを提出させて、評価の対象としています。パフォーマンステストを教師と生徒の1対1で行うと、生徒に待ち時間が発生し、評価も大変でしたが、そういった課題が解消されました」

19年度2学年では、「社会探究」との連動も視野に入れている。例えば、生徒に「クローン技術」について英語で説明させるなど、専門的な内容を英語で発表できるよう、リテリング力を高めていきたい考えだ。

また、進路指導では個別の対応が一層重要になると、内藤先生は考えている。

「AO・推薦入試の募集人員の拡大が見込まれる中、生徒それぞれに合う入試形態を、教師が見極めなければなりません。これまで以上に生徒との面談を綿密に行い、教師同士で情報共有を図りながら、大学入試改革に対応した進路指導を模索していきたいと考えています」

図2 「協働ゼミ」の全体像



2018年度の協働ゼミのテーマ

日本臺灣（たいわん）文化（注1）、ビジネス、ツーリズム、社会福祉、地域活性、アフリカ、法と政治、アート、アジア、食、口永良部島、教育、エコロジー、STEM 教育（注2）、メディアデザイン、スポーツ、人間科学（心理、哲学）

注1）日本と台湾の文化。　注2）STEM は、Science、Technology、Engineering 、Mathematics の頭文字で、STEM 教育は、科学・技術・工学・数学に重点を置いた教育、人材育成のこと。

＊学校資料を基に編集部で作成。

＊4 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。